

# 中国における異性愛主義的学校文化 —教科書の内容分析を通して—

徐崢睿

上智大学大学院

**概要：**本論文の目的は、隠れたカリキュラムに着目し、中国の学校文化はどのようにセクシズム/ヘテロセクシズムを再生産しているかを解明することである。教科書に書かれる内容は学校文化の中の重要な一部であり、子どもの価値観形成に重要な役割を果たしている。そのため、本論文は教科内容研究の手法を採用し、中国で最も広く使われている人民教育出版社が発行した中学生向け教科書『語文』（2018年発行）と『道德与法治』（2016年発行）を分析資料として使用した。分析を通して、中国の『語文』と『道德与法治』の教科書には、異性愛以外のセクシュアリティが扱われていないことを明らかにした。現代中国の学校は、「将来的な異性愛者」という模範的生徒像を提示している。そして、異性愛以外のセクシュアリティに対する「無視」という「隠れたカリキュラム」をとおしてヘテロセクシズムを再生産し、異性愛主義に貫かれた学校空間を構築している。これにより、教室から異性愛以外のセクシュアリティを消し去り、異性愛以外のセクシュアリティの経験を教育とは無関係にし、ヘテロセクシズムを補強している。  
**キーワード：**異性愛主義（ヘテロセクシズム） 隠れたカリキュラム 性差別（セクシズム）

## *Heterosexist School Culture in China —A Content Analysis of Textbooks—*

Zhengrui Xu

Graduate school of education Sophia University

**Abstract:** *The purpose of this paper is to shed light on how Chinese school culture reproduces sexism/heterosexism by focusing on the hidden curriculum. The content in textbooks is an important part of school culture and plays an important role in the formation of students' values. Therefore, this paper adopts a subject matter content study approach, using the most widely used textbooks in China, Chinese Language (published in 2018) and Morality and Rule of Law (published in 2016), published by the People's Education Press for secondary school students, as the material for analysis. Through our analysis, we found that Chinese textbooks on Chinese Language and Morality and Rule of Law do not address any sexuality other than heterosexuality. Modern Chinese schools portray model students as "future heterosexuals." They then reproduce heterosexism through a "hidden curriculum" that "ignores" sexuality outside of heterosexuality and constructs school spaces filled with heterosexism. This erases sexuality outside of heterosexuality from the classroom, making the experience of sexuality outside of heterosexuality irrelevant to education and reinforcing heterosexism.*

**Keywords:** *Heterosexism, Hidden curriculum, Sexism*

## 1. はじめに

現在、世界中における性的マイノリティに関する議論が盛んに飛び交っている。世界各地において、LGBTQ+に対する理解を求めるデモ等、LGBTQ+の権利を守る社会運動が頻繁に行われており、同性婚の合法化に向けた法案は世界各地において成立している。中国でも1997年の刑法改正により、同性愛を不良行為に当たる流氓（ごろつき、ならず者といった意味）罪の対象から除外され、2001年以降は中国精神医学会の基準でも「精神疾患」に分類されなくなった。2019年に、中国の全国人民代表大会法律工作員会の3回目の記者会見では、民法の婚姻家庭編草案についての意見募集の中に、同性結婚の合法化を民法の婚姻家庭編に書き込むべきであるという意見があったと公表した。最終的にこの意見が採用されなかったが、性的多様性をめぐる社会情勢の変化の動きは、ますます高まってきたように思われる。

しかし、中国社会にはヘテロセクシズム（異性愛主義）は依然として強く作用しており、同性愛にスティグマが付与されている。中国社会では、古来より儒教の影響が深く、男尊女卑や伝宗接代（代々血統を継ぐ）のような思想が存在する。さらに、清末に輸入された「ロマンティック・ラブ・イデオロギー<sup>1</sup>」の影響と相まって、同性愛者の生活に大きな脅威を与えている。このような社会的環境において、非異性愛者のセクシュアリティは認められず、ヘテロセクシズムという主流から差別され、排除され、人間の正統的な家族像や価値観を破壊するものとみなされる。ヘテロセクシズムの社会において、異性愛的な言説が非異性愛者を抑圧しており、言説的なヘゲモニーになっていると言える（李 2003）。

文化的再生産理論によれば、学校教育は社会の不平等と社会秩序を再生産する。学校教育はジェンダー役割に関する意識の形成において、重要な作用を果たしている。学校はジェンダー平等という建前を取っているが、「隠れたカリキュラム」という、学校において明示されることなく暗黙のうちに伝達される知識や規範が存在する。学校における教育活動の主要な道具である教科書は、当然ながら子どもたちのジェンダー社会化の過程で重要な役割を果たす。しかし、教科書は、客観的な知識を伝えることを目的とされながら、その中の言語表現などは必ずしもジェンダー平等的ではなく、「隠れたカリキュラム」を通して男性優位や異性愛の優位といったジェンダー価値が伝達されている恐れがある。

このことに関連して、フーコーは『監獄の誕生』の中に以下のように述べている。

われわれが承認しなければならないのは、権力は何らかの知を生み出す（ただ単に、知は奉仕してくれるから知を優遇することによってとか、あるいは、知は有益だから知を応用することによってとか、だけではなく）という点であり、権力と知は相互的に直接含みあうという点、また、ある知の領域との相関関係が組立てられなければ権力的関連は存在しないし、同時に権力的関連を想定したり組立てたりしないような知は存在しないという点である。（フーコー 1975=1977：34）

---

<sup>1</sup> 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」とは、一生に一度の相手と恋に落ち、結婚し、子どもを産み育てるという物語であり、愛と性と生殖が、結婚を経て一体化したものである（千田ほか 2013：39）。

つまり、知識を構成しない権力関係は存在しないし、権力関係を前提としない知識も存在しないのである。近年、多くの教育学者は教科書の偏見に目を向け、差別の解消を強調してきたが、それは一般に男女差別に関してである。しかし、それとともに、教科書がヘテロセクシズムを示す方法、すなわち、異性愛が他のタイプのセクシュアリティよりも優れていることを教科書がどのように提示しているのかに注意を払う必要があると主張する。

この点を明らかにするために、本稿は中国において性教育の役割を担っている道徳教科書の『道徳与法治』（道徳と法治）と、子どものジェンダー意識に大きな影響を与えると考えられる『語文』（国語）を取り上げ、教科書に潜在する「隠れたカリキュラム」としてのヘテロセクシズムを可視化することを試みる。

## 2. 先行研究

中国では、教科書に示されるジェンダーの不平等が多く研究者によって研究されてきた。例えば、褚・張（2021）は、人民教育出版社が発行した1950、1980、1990、2010年の四つの時代の中学校数学教科書を分析し、1980年代以降、「男性中心主義」がより強く、隠れた、多様な形で出現していることを明らかにしている。主に、（1）男性が社会的地位の高い職業に従事すること、（2）男性がより多くの社会的責任を負うこと、（3）男女の「役割」の違い、などが挙げられる。邱（2018）も、上海教育出版社が発行した中学校国語教科書を分析し、以下の結論を出した。つまり、教科書の女性登場人物の数が少ない、女性の登場人物はほとんどが脇役として存在する、女性の社会的役割の種類が著しく不足している、女性の登場人物はほとんどが良妻や母親という家庭的役割である。

他にも、教科書が男性中心性を有し、女性に対する偏見が見られるとする研究者からの批判は数多くある（田 2012、魏 2014、張 2015、劉ら 2021…）。

しかし、これらはいずれもセクシュアリティを含めない狭義のジェンダーについての議論であり、セクシュアリティを含めた広義のジェンダー（小宮 2001）をめぐる議論は見あたらない。小宮（2011）の日本の教科書の変革に対する評価<sup>2</sup>を借りれば、すなわち、性差別（セクシズム）の観点からの指摘がなされているが、異性愛主義（ヘテロセクシズム）の観点からの批判が見えていない。つまり、このような研究はセクシズムとヘテロセクシズムは切り離すことができず、表裏一体なものであることを認識できていないのである。バトラー（1990）は、「セックス」は「ジェンダー」と同様に文化的に構築されているとし、「異性愛のマトリクス」という概念を提示した。そして、「異性愛のマトリクスが意味するのは、ジェンダーの理解可能性について覇権的な言説/認識のモデルであり、身体的首尾一貫や意味可能性のために安定したセックスが必要だとみなす考え方である。その場合の安定したセックスは、異性愛の強制的な実践をとおして安定したジェンダー概念によって表出されると考えられる」と定義し、「強制的で自然化された異性愛制度は、男という項を女という項から差異化し、かつ、その差異化が異

---

<sup>2</sup> 小宮（2011）は、日本におけるジェンダー視点から国語教科書を提え直す試みは、戦後、蓄積されてきている。しかし、セクシュアリティを含まない狭義のジェンダーをめぐる教科書の変革は、一定程度達成してきているが、セクシュアリティを含めた広義のジェンダーをめぐる教科書の変革は進んでいるように見えないと指摘した。

性愛の欲望の実践をとおして達成されるような二元的なジェンダーを必要とし、またそのようなものとしてジェンダーを規定していく（バトラー 1990=2018:262）」と述べている。

このように「強制的で自然化された異性愛制度」は、女性への抑圧だけでなく、覇権的男性規範に当てはまらない男性への抑圧にも深く関わっているのである（Connell 1995）。村上（2018）は、「男女の（生物学的）性差は、女性を男性と平等な政治主体とは認めないことを正当化してきた排除の論理と深く結びついている」と述べ、男女平等理念が異性愛主義と結びつき、ジェンダー平等推進にとって反動的に利用される危険性があることを示唆した（村上 2018）。

### 3. 研究目的と分析の枠組み

以上の問題関心に基づいて、本稿は隠れたカリキュラムに着目し、中国の学校文化がどのようにセクシズム/ヘテロセクシズムを再生産しているかを、教科書の内容分析を通して明らかにすることを目的とする。そのため、中学教科書の内容分析を行う。分析資料として、中国で最も広く使われている人民教育出版社が発行した中学生向け教科書『語文』（国語）（2018年発行）と『道徳与法治』（道徳と法治）（2016年発行）を使用する。これより、現代中国の学校文化が非異性愛者をどのように排除しているかを描いていく。

なお、教科書に関する代表的な社会学的研究者のマイケル・アップルが著した『イデオロギーとカリキュラム』という著作を嚆矢として、教科書は知識社会学的に研究され、カリキュラムの内容、教材の文章などが学校知識のイデオロギー研究の対象となった。教科書に記載された知識の内容分析によって、現代社会におけるヘゲモニーによる文化支配を暴くことができる。本稿は、テキストを分析対象とする記号論的手法で、教科書の異性愛主義に関するイデオロギーを分析する。分析にあたって、カール・グラントとクリスティン・スリーターの「ストーリーライン分析」<sup>3</sup>を参考した。

### 4. 『道徳与法治』（道徳と法治）の分析

中国教育部は、2016年、義務教育段階の小中学校で用いられる教科書『品德与生活』（品德と生活）（小学校向け）『思想品德』（中学校向け）の名を『道徳与法治』（道

---

<sup>3</sup> カール・グラントとクリスティン・スリーターの「ストーリーライン分析」は、主として社会科諸科目の教科書を内容分析するための手法である（Grant and Sleeter 1998）。人種・階級・ジェンダーごとのグループそれぞれの、対象テキストにおけるプライオリティを把握することがこの分析手法の目的であり、その意味でこの分析手法は諸グループ間の社会的関係を把握することに特化している。検討されるのは、①いずれのグループが最も持続的な注意を払われているか、②誰にとっての「問題」が語られ、どのグループによってそれが「解決」されているか、③その他にどのグループが登場し、それらが「問題」の発生と解決にいかなる関与をしているか、④書き手は、読者が誰の経験から最も多くを学び、どのグループを同調あるいは尊重の対象とすることを意図しているか、である（岡本 2001）。しかし、本文に書いてあるように、中国の教科書において、異性愛以外の性は「無視」され、同性愛などの性的指向を持つ人は一度も教科書に出てこない。なので、同性愛などを逸脱として問題化することも教科書には存在しない。そのゆえ、本稿が主に検討しているのは、①と④である。

徳と法治)に変更した<sup>4</sup>。教育部が策定した『道德与法治課程標準(2022年版)』(「道德与法治」のカリキュラムの基準)によると、『道德与法治』という教科は、市民の道德的教養と法治に対する素養を向上させるための教科である。社会の発展や生徒の成長を考慮し、正しい政治的思考、道德規範、法の支配の概念に基づいた体系的な道德・法律教育として位置づけられている。学生の思想的・政治的資質、道德的教養、法治への理解、人格的教養などを高め、中国人としての志と精神を高め、中華民族の偉大なる復興を実現する理想と能力、責任を備えた新しい世代を育成するための確固たる思想的基礎を築くための義務教育段階の必修科目であり、政治的、思想的、包括的、実践的な課程であると示されている。

そのうち、中学校の学習テーマ「生命の安全と健康教育」の内容要件には、「思春期の心身の変化を理解し、思春期の素晴らしさを実感し、思春期の悩みを克服する力を身につけること、思春期の性に関する知識を身につけ、男女関係を正しく扱うこと、セクシャルハラスメントや性的虐待を防止する能力を高めること」と明記されている。ここで注目すべきなのは、このカリキュラムの基準では「男女関係」という言葉が使われ、恋愛関係を男女間のものに限定し、ヘテロセクシズムに則った記述となっていることである。

中国では、中学・高校での恋愛は反学校的な文化とされており、カリキュラムの基準に「男女関係を適切に扱うこと」が明記されているのは、中学・高校での恋愛(中国では「早恋」という言葉を使う)が学校文化からの逸脱とみなされているためである。「適切に扱うこと」というのは、中学・高校では男女の生徒は恋愛関係を結んではならず、友たちという枠を超えてはいけないという警告である。一方で、非異性愛者については、まるで学校に存在しないかのように、教科書に登場する資格すらない。これは、カリキュラムにおけるジェンダー二元論のあらわれであり、ヘテロセクシズムの再生産であるとも言える。このように、教科書『道德与法治』の中で、ヘテロセクシズムは隠れたカリキュラムによって再生産され、非異性愛者の人々を差別している。

以下では、『道德与法治』の教科書の内容分析を行い、セクシズムとヘテロセクシズムがどのように再生産されているのかを明らかにする。

#### 4. 1. ジェンダー・ステレオタイプについて

『道德与法治』の青春期についての章では、性別について以下のように記されている。

性役割への意識は、自分と異性の違いを理解し、自己イメージの形成や異性との付き合い方を学ぶのに役立つが、ジェンダーに対するステレオタイプは、ある程度、自分の潜在能力に影響を与えることもある。私たちは、ジェンダー・ステレオタイプにあまり影響されずに、自分の生物学的な性別を受け入れるべきである。(『道德与法治』(2016年発行)7年級下冊 16頁、引用者訳)

このテキストから見ると、『道德与法治』は「性役割への意識」を生物学的な性別(セックス)と区別し、ジェンダーという社会的性差として扱っている。「ジェンダーに対

<sup>4</sup> 『关于2016年中小学教学用书有关事项的通知』(2016年小中学校の教科書に関する事項についての通知)による。

するステレオタイプは、ある程度、自分の潜在能力に影響を与える」というセンテンスは、ジェンダーに対するステレオタイプは自分の成長の妨げになる可能性に言及し、それを防ぐ必要性をとらえている。つまり、『道徳与法治』はジェンダーとセックスの二元論に基づき、可変性を持つジェンダーと不変のセックスという考え方を持っており、文化的構築物であるジェンダーに気をつけて、自分の可能性をジェンダーで狭めないことを提唱している。

しかし、ここには2つの大きな問題が存在している。一つ目は、このセンテンスでは、ジェンダー・ステレオタイプが自分自身に与える影響、つまり、自分の潜在的な能力の発揮に影響を与える可能性についてしか触れられていないのである。しかし、ジェンダー・ステレオタイプに最も影響を受けるのは、社会的に弱い立場にいる人たちではないだろうか？例えば、男らしくない男の子、男の子が好きなものが好きな女の子などである。真の社会的公正教育（グッドマン 2011）を実現するために、そのようなステレオタイプ（レッテル）が自分自身への影響だけでなく、他者（マイノリティ）に与える害について子どもたちに教えるとともに、マジョリティが持つ特権についての自覚を意識させることが重要ではないだろうか？マジョリティ側の意識の問題を解決しなければ、セクシズムは再生産され続け、決して解決されることはないのではないだろうか。

二つ目は、セックスとジェンダー二元論のパラドクスの問題である。「自分の生物学的な性別を受け入れるべき」というフレーズは、セックスを棚上げにして視野の外に置いた。その結果、「セックス・レベルの性差は実在するばかりでなく、人間の思考や社会的行動もそれによって大きく規定されている」といった「セックスの逆襲」に対して批判や反論がしにくくなり、生物学的決定論の超克に必ずしも成功していない（荻野 2002 : 13）。また、「自分と異性の違い」「異性との付き合い方」などのフレーズは、男女のジェンダー二元論を暗示し、女性のなかの差異、男性の中の差異を覆い隠し、本質主義に陥っていると見える（小玉ほか 2019 : 85）。つまり、以上のテキストは、一見、ジェンダー・ステレオタイプを否定しているように見えるが、生物学的な性（セックス）の受け入れを基本原則としており、同性間の違いを無視するだけでなく、トランスジェンダーなどの性的マイノリティの存在も否定している。

#### 4. 2. 恋愛関係について

恋愛関係に関して、『道徳与法治』の教科書では次のように述べられている。

思春期に入ると、今までにない心の潮流が静かに押し寄せ、思春期の心理的な顕在化という特殊な感情体験をもたらす。異性の前で自分を表現したい、自分のイメージを大切にしたい、異性に肯定されたい、認められたいという欲求があるのである。（『道徳与法治』（2016年発行）7年級下册 18頁、引用者訳）

異性との交流の過程で、異性への思いや、良いものへの欲求に喜びを感じ、それを恋と解釈しがちである。実は、これは本当の恋ではない。（『道徳与法治』（2016年発行）7年級下册 20頁、引用者訳）

世の中には何事にも時期というものがあり、青リンゴは見た目は美しいが、食べると酸っぱい。生活の中で生じるかもしれないもやもやを前にして、慎重かつ機敏に対応しなければならない。（『道徳与法治』（2016年発行）7年級下册 21頁、引用者訳）

恋(原文中国語:愛情)には、他人を愛する能力が必要であり、それには自己成熟、道徳的完成、家族に対する責任などが含まれる。恋とは、互いに対する深い理解、一定の物質的基礎と共通の人生理想を有し、強く安定した一途な気持ちである。真の恋は、尊敬、責任、感謝、平等、自律を伴うものである。(『道徳与法治』(2016年発行)7年級下冊 22頁、引用者訳)

以上のテキストからわかるように、『道徳与法治』は、思春期の恋愛感情を「特殊な感情体験」という言葉を使い、思春期にふさわしくないものとして否定している。恋愛の目的は、将来結婚し、家庭を築くことであり、高校生は家庭を支えるだけの収入がないため、高校卒業前の恋愛は否定される。ここには、異性間の恋愛を、性、結婚と出産と密接不可分と見なす中国のロマンティック・ラブ・イデオロギーの深い影響が見られる。

また、このことは、性的マイノリティに対する排除にも繋がっている。なぜなら、同性愛者同士は結婚できず、子どもも作れない(技術的には可能になったと言われているが、社会に受け入れられていない)からである。思春期の「特殊な感情体験」が異性に対するものと定義されていることから、『道徳与法治』カリキュラム全体が、ヘテロセクシズムのヘゲモニーに基づいていることが伺える。

なお、『道徳与法治』では、「将来的な異性愛者」という模範的生徒像を提示しており、それがもっとも学校の規範に適合する(性に関する)生徒像とみなされる。「将来的な異性愛者」というのは、今は性について考えず、異性との恋愛をせず、その一線を絶対超えないが、将来的には異性と恋をして、異性愛に基づく近代家族を築く人物像である。異性愛主義の社会では、黙っていれば異性愛者と見なされるが、中国の学校は異性愛主義的とはいえ、社会における異性愛主義と異なり、黙っていれば「将来的な異性愛者」とみなされるのである。

この「将来的な異性愛者」という模範的生徒像があるため、同性愛者は自分から学校の公的な場で「声」(カミングアウト、同性愛者とみなされる言動)を出さない限り、学校に規範的な「将来的な異性愛者」として識別される。また、同性愛者のカップルは二人が同性である故に、学校には友人関係として黙認され、同性同士の恋愛関係はかえって校則や教師に見えないブラックボックスに置かれている。中国の学校文化においてヘテロセクシズムに基づいているにも関わらず異性間の恋愛が逸脱視されていることは、逆に同性愛者どうしの恋愛の温床になる可能性を秘めていると言える。

## 5. 『語文』(国語)の分析

国語の教科書に掲載される文学作品は、既存の文化や社会・経済の影響を受け、それを反映する(河野ほか 2018)。国語教科書の中には多くのキャラクターが描かれているが、これらのキャラクターが演じているジェンダーが読み手のジェンダー意識に大きな影響を与えると考えられる。朱紹禹は、「国語の教材、特に教科書は、常に幅広い人々を対象とし、教育する子どもに直接影響を与え、その影響力は、世界中のどんな本にも、たとえ最も人気のある本にも劣らないほど広く、長く、深い。国語の教科書は、民族の精神を育み、完全な人格を形成する使命を担っている」と述べている(史 2001:417)。そこで本節では、人民教育出版社の中学生向けの国語教科書『語文』(国語)(2018年発行)の教科書を分析することで、「目に見える制度」としての国語教科書に潜在する、

「目に見えない制度」としてのヘテロセクシズムを可視化することを試みる。具体的に、『語文』の教科書のなかに性愛をめぐる記述の有無やその内容について確認し、「隠れたカリキュラム」の視点から、セクシズム/ヘテロセクシズムを再生産し非異性愛者を排除する傾向を有する文章を析出し、検討を行う。

まず、性愛をめぐる記述の有無を確認したところ、直接性愛についての記述は見られなかった。それは中国の性教育は禁欲性教育（純潔教育）を原則としているからだと考えられる（李ほか 2022）。しかし、異性間の性愛を示唆・暗示する記述が見られた。一方で、同性間の性愛を示唆・暗示する記述は見られなかった。次に、異性間の性愛を表象あるいは示唆する記述のある文章をまとめ、セクシズム/ヘテロセクシズムに関連する記述を抽出し、それに基づいて分析を加えていく。

#### 4. 1. 「散歩」（7年次上 23-24 頁）

- 粗筋：これは著者と著者の妻、母親、息子の四人が一緒に野原を散歩している場面を書いている。散歩の途中、突然分かれ道が現れ、この分かれ道を前に、母と息子の意見が相違した。著者の息子は小道を進みたいが、著者の母親は大道を通りたいと言い出した、著者は母親に相槌を打ち、大道を通ることにしようと言い出す。結局、著者の母親は孫のために小道を歩むことに同意した。三世代が静かに道を歩いた場面が描かれている。
- 異性愛を暗示する記述：

母は大きな道を望んでいて、大きな道はスムーズだから、息子は小さな道を望んでいて、小さな道は面白いから…しかし、すべては私次第だ。私の母は高齢で、昔から強い息子（私）の言うことに慣れ、私の息子は幼く、まだ背の高い父の言うことに慣れ、そして妻は外で、いつも私の言うことを聞いてくれるのである。（『語文』（2018年発行）7年級上册 23頁、引用者訳）

（小道を進んだ後）ある場所に着くと、私はしゃがんで母を、妻はしゃがんで息子をおんぶした。母は背が高いが痩せているので当然重くはなく、息子は太っているが幼いので当然軽かった。しかし、私も妻も、ゆっくり、着実に、慎重に歩を進めた。私の背中にあるものと、彼女の背中にあるものが、まるで全世界のものになったかのように。（『語文』（2018年発行）7年級上册 24頁、引用者訳）
- 分析：この文章は、三世代と一緒に散歩をする様子を描くことで、家族の相互尊重と愛情が伝わってくる。確かに、異性間の性愛に関する言葉は出てこないが、しかし、注目すべきなのは、ここでいう家族間の愛情とは、異性愛家族に基づく喜びのことである。なぜなら、本文に書いてあるように、著者の背中にある母親と、妻の背中にある息子が、著者にとって全世界のものだからである。そのような喜びを感じられるのは、血のつながりのある家族でないとできない。中国社会における家族の血統継承の重要性を示し、生殖に結びつく異性愛を正当化しようとしていると考えられる。さらに、ここで引用した文章は、現代の家族において、家族の中で強い男が支配的な立場にあることを強調している。「母は高齢で、強い息子（私）の言うことに昔から慣れ、私の息子は幼く、まだ背の高い父の言うことに慣れ、そして妻は外で、いつも私の言うことを聞いてくれる」という文章は、壮年男子が家庭内に支配的地位にあることを暗黙のうちに伝わっている。従って、この文章の主旨自体が異性愛主義と男性中心主義と親和的であることを示している。

#### 4. 2. 「女媧の人間創造」(7年次上 121-124頁)

- 粗筋：女媧という女神は中国神話において、人間をつくった存在である。この文章は、彼女が人類を創造する過程について書かれている。天と地が開かれた後、女媧は天と地の間に生命を吹き込むために、自分をモデルにして黄土をこねて人形を作っていた。しかし、この作業は女媧にとっては手間がかかりすぎるため、彼女は泥の中に縄を入れて引っ張り出すと、飛び散った飛沫も人間になった。そのような人間は、それまで黄土をこねてつくった人と変わらない。人類を永続させるために、彼女は人間を男と女に分け、協力して子どもを育てる責任を負わせた。
- 異性愛を暗示する記述：  
女媧は「人間は必ず死ぬのだから、死んだ後にまた新しい人間を作らなければならぬのか」と考えていた。どうすれば永続させることができるのか？これは問題だった。ついに彼女は、人間を男女に分け、男女が協力して協力して子どもを育てる責任を負うことを思いついたのだ。こうして、人類は何世代にもわたって存続し、日に日に多くなっていったのである。（『語文』（2018年発行）7年級上册 124頁、引用者訳）
- 分析：この文章は、中国の神話「女媧の人間創造」を改編にしたものである。女媧による人間の創造と、人間を男と女へ分ける全過程を描き、人類の存続は必然的に男女の結婚に依存することを強調している。生殖に直接関連する異性愛の自然さと正統性が暗黙のうちに強調されているのである。

#### 4. 3. 「関雎」(8年次下 61頁)

- 粗筋：この詩は、ミサゴの夫婦が川の中州で和やかに鳴きかわっている様子と、生い茂った水菜を摘むという行為を用いて、淑女と君子を連想させる。この詩は、主人公の淑女に対する愛を表している。
- 異性愛を暗示する記述：  
あのミサゴの妻のような美しい淑女こそ、君子の妻とするに相応しい。  
美しい淑女を、君子は寝ても覚めても探し求めるものだ。  
手に入れた美しい淑女は、琴や瑟を奏でて迎えよう。（『語文』（2018年発行）8年級上册 61頁、引用者訳）
- 分析：関雎は、古代中国文学で最も有名な詩の1つである。詩の内容は、若い貴族の結婚相手として、善良で美しい乙女を見つけるというものである。解説によると、もともとは結婚式の詩で、男性の家族が花嫁を称え、良い結婚ができるようにと書いたものとされている。もちろん、詩そのものは、女性を追い求める男の恋の歌という形になっている。その理由は、一般的な夫婦関係において、男性が積極的な当事者であることが関係していると思われる。それに、この詩が夫婦の徳の模範的表現として取り上げられる。なぜなら、若い男女のはかない出会いや一瞬の情熱ではなく、最初から明確な結婚の目的を持ち、最終的には夫婦の成就に至る恋愛を描いているからだ。従って、この詩は、中国古代の結婚を明確に意識し、責任感を持つ恋愛を描き、古代から男女の恋愛結婚は一般的、自然的なものという文化を生徒に植え付けようとしている。これによって、現代のロマンティック・ラブ・イデオロギーを正統化し、異性愛主義の再生産を図っていると考えられる。

#### 4. 4. 「ユール叔父さん」(9年次上 71-75頁)

- 粗筋：若い頃のユールは散財しすぎてならず者とみなされ、家を追い出された。しかし、アメリカに来た彼は、お金を稼ぎ、皆が憧れる存在になる。フィリップ(主人公)の家族は、金持ちのユールの帰りを心待ちにしていた。次姉に婚約者ができたと喜ぶ一家は、海外旅行に行った。旅行の船で、ユールに似た貧しい牡蠣売りに出会った。フィリップの父親は、船長に尋ねることで、牡蠣売りがユールであることを確信した。一攫千金も上流社会へ進出することもむなしい夢となるばかりか、次女の結婚も危うくなってきた。結局、一家はユールとの再会がないように、何も言わずに別の船で帰っていった。
- 異性愛を暗示する記述：  
「私の長姉は28歳、次姉は26歳でした。いつも夫が見つからず、一家を悩ませていた。そしてついに、次姉に興味を持ったという男性が訪ねてきた。公務員でお金はないが、誠実で信頼できる人だった。」(『語文』(2018年発行)9年級上册 72頁、引用者訳)
- 分析：この文章は、直接的に性愛に関わる要素はないように見えるが、テキスト全体は異性愛主義に基づく近代家族がベースになっている。異性同士の対関係とその間にできた子どもが近代家族の要件である(小宮 2011:37)ことから、この小説の構図自体が異性愛主義的である。それに、上記の引用文からも、女性は年頃になってから男性と結婚すべきだという価値観がうかがえる。

#### 4. 5. 『語文』(国語)から見る異性愛主義のまとめ

『語文』(国語)には、以上の単元ほかにも、異性愛を暗示する記述のある文章が多くある。例えば、七年次上の「蓮の葉・母親(荷叶・母親)」や8年次上の「母との思い出(回憶我的母親)」などの単元は、いずれも異性愛家族に基づく愛情を描いている。このように『語文』(国語)には、異性愛の家族、異性との性愛についての言及または暗示が数多くあることを確認することができる。一方、同性間のセクシュアリティについての言及または暗示はまったくない。つまり、『語文』(国語)において、異性愛者というグループが最も持続的な注意を払われているため、読み手である生徒は異性愛の経験から最も多くを学び、異性愛のみを同調あるいは尊重の対象とすることを意図している。その意味で、中国の中学校の国語教科書がヘテロセクシュアルのみを提示しており、社会におけるヘテロセクシズムの影響を強く受けていることがわかる。

#### 5. 考察

「教科書に書かれる内容は、家族の会話の中にも登場し、価値観形成の要素ともなる」(河野ほか 2018)。以上の中国の教科書の内容分析を通して、教科書から同性愛などの非異性愛者を否定している言葉は見られなかった。しかし、異性愛以外のセクシュアリティは一度も文章に出てこない。言い換えれば、「無視」という方法を通して、ヘテロセクシュアル以外の性を排除していると言える。「教室の中では、言われたことよりも言われなかったことの方が重要である」という指摘を踏まえれば(Shortall 1998:61)、「無視」することは、ヘテロセクシズムを、異性愛が他のすべてのセクシュアリティよりも優れており、しばしばそれが唯一の自然または正常なセクシュアリティであることを生徒に教え込むことになるだろう。例えば、『道德与法治』の教科書の中に書

かされている「思春期に入ると、(中略)異性の前で自分を表現したい、自分のイメージを大切にしたい、異性に肯定されたい、認められたいという欲求があるのである」のように、思春期についての議論では、一貫して異性愛が前提となっている。また、家族についての議論も、親が異性であることを前提にしており、生徒の将来も異性愛家族を築くべきことが暗示されている。カップルは男性と女性、親は母親と父親、思春期は異性に興味を持つ時期などを教科書の中に何度も提示することで、ヘテロセクシズムの価値観を生徒に植え付けようとしている。このような異性愛以外のセクシュアリティへの「無視」は、「制度化されたヘテロセクシズムのプロセスの一部であり、異性愛が唯一の正常なセクシュアリティであり、したがって生徒にとって唯一の関連するセクシュアリティであることを明確にする方法である」(Temple 2005)。このようなヘテロセクシズムが強く溢れる教科書は、ヘテロセクシズム的な環境を作り出し、学校が同性愛などの非異性愛者への嫌悪を醸し出す恐れがある。非異性愛者へのいじめや嫌がらせが起こることが想定できる。

しかし、ここで注意すべきなのは、他の社会の異性愛主義的な文脈と異なり、中国の学校文化が期待している生徒像は「将来的な異性愛者」である。つまり、学校は異性愛の正当性を暗示しつつ、今の時期の異性間の恋愛を逸脱視される。また、「将来的な異性愛者」という模範的生徒像があるため、性的マイノリティの子どもたちは自分から「声」を出さない限り、学校に規範的な「将来的な異性愛者」として識別される。そのため、性的マイノリティの生徒たちは「将来的な異性愛者」になりすまして、学校における危機を回避しているかもしれない。

まとめていうと、現代中国の学校において、異性愛以外のセクシュアリティに対する「無視」という「隠れたカリキュラム」をとおして、異性愛主義的な学校文化が作り出された。これにより、教室から異性愛以外のセクシュアリティを消し去り、異性愛以外のセクシュアリティの経験を教育とは無関係にし、異性愛以外のセクシュアリティを沈黙させ、ヘテロセクシズムを補強していると考えられる。このような「性的マイノリティの不在が前提となっている」学校文化が飛び交う学校環境にいる性的マイノリティの子どもたちは、学校で自分のセクシュアリティを開示することができない、正しい知識を得られにくい、身近に相談できる人がない、ロールモデルが見えないといった困難を抱えている(薬師 2017)。このような非異性愛者を排除する学校環境にいる性的マイノリティの子どもはどのように困難に対処し、自分のセクシュアリティを受容してきたのかについて、さらに考察する必要がある。

## 6. 終わりに

本稿は、教科書の内容分析を通して、中国の学校文化はヘテロセクシズムを再生産し、非異性愛者を排除する傾向があることを見出した。非異性愛者への「無視」を通して、異性愛主義に貫かれた学校空間が構築されてきた。このような学校空間に置かれている性的マイノリティの生徒は、自分のセクシュアリティへの苦悩や生きづらさを抱える恐れがある。学校文化に排除された彼らは、学校外で自分の居場所を見つけるか、学校内で反学校的生徒文化を形成し、それに対抗するか、についてはさらなる研究が必要である。確かに、本稿は中国の学校文化は異性間の恋愛が逸脱視されていることは、逆に同性同士の恋愛関係はブラックボックスに置かれ、同性愛者どうしの恋愛の温床になる可能性があることについて言及したが、同性愛カップルが成立する前提として、同性への

告白がなければならない。すなわち、自分のセクシュアリティを相手に知らせるということの意味する。このため、告白することによって、自分を危険に晒される可能性が増えてしまう。このような葛藤に直面している同性愛者はどういうふうに対処するのかについては別稿で論じたい。

ユネスコは、「教科書は全ての人のための教育とジェンダー平等、人権と平和のための教育にとって重要な手段なり得る」と述べている（河野 2018）。この指摘に基づけば、本当のジェンダー平等を実現するには、異性愛以外の性愛を否定的に感受させるヘテロセクシズム的な教科書を修正する必要がある。

残された課題は教科書以外の、さまざまな学校文化の要素を分析の対象に含めることである。学生の全体的な学校経験に影響を与える教室内のダイナミクス、教師の意識などが分析されていない。また、教室内のヘテロセクシズムに基づく振る舞いや、教師養成課程における性の多様性に関する教育の欠如についても、分析の対象に入れていく必要がある。

## 参考文献

### 日本語文献

- 岡本智周 「20 世紀後半の米国歴史教科書に表現された「日系アメリカ人」像の変質—多文化教育と共同体統合に関して」教育社会学研究 68 巻, pp. 127-146, 2001
- 荻野美穂 「ジェンダー化される身体」, 勁草書房, p. 13, 2002
- 河野銀子・藤田由美子編「新版 教育社会とジェンダー」, 学文社, 2018
- 小宮明彦 「国語教科書の中の異性愛主義: 「目に見える制度」の中の「目に見えない制度」」『ことば: 研究誌』32 号, pp. 32-54, 2011
- 小宮明彦 「包括的ジェンダー論教育に向けて—(性的)マイノリティを疎外しないジェンダー論教育を」『現代性教育研究月報』19 巻, 7 号, pp. 8-12, 2001
- 石田仁 「はじめて学ぶ LGBT 基礎からトレンドまで」, ナツメ社, 2019
- 千田有紀・中西裕子・青山薫『ジェンダー論をつかむ』, 有斐閣, p. 39, 2013
- 村上彩佳 「男女平等理念が異性愛主義と結びつく危険性—フランス市民の「パリテ」解釈を事例に—」『フォーラム現代社会学』17 巻, pp. 63-77, 2018
- 木村元・小玉重夫・船橋一男 「教育学をつかむ 改訂版」, 有斐閣, p. 83, 2019
- 薬師実芳 「多様な性から多様性が受け入れあえる社会を目指して」『神奈川大学評論』88 号, pp. 83-91, 2017

### 外国語文献

- Butler, J. *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*. New York, NY: Routledge. (1990). (竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』, 青土社, 2018)
- Connell, R. A. *Masculinities*. Berkeley: University of California Press. (1995).
- Foucault, M. *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Gallimard. (1975). (田村淑訳『監獄の誕生—監視と処罰』, 新潮社, pp. 34 頁, 1977)
- Grant, Carl A., and Christine E. Sleeter. *Turning on Learning: Five Approaches for Multicultural Teaching Plans for Race, Class, Gender, and Disability*, 2nd Edition, NJ: Prentice Hall. (1998)
- Shortall, A. *The social construction of homophobia and heterosexism in the Newfoundland education system*.

- Masters thesis, Memorial University of Newfoundland. (1998).
- Temple, J.R. “People Who Are Different from You”: Heterosexism in Quebec High School Textbooks. *Canadian Journal of Education*, Vol. 28, No. 3, pp. 271-294, (2005).
- 褚小婧, 张维忠 “教科书性别角色观念及形成机制分析—以人教版数学教科书为例” 《浙江师范大学学报(社会科学版)》, 2021年第1期(总第232期)》, 第46卷, pp. 107-113, 2021
- 李海兰, 杨慧杰, 罗毓仪, 武敬沂, 刘泽霖, 蔡颖悦, 邵逸明, 谢炼, 高钰琳 “中小学性教育现状与对策思考” 《中国学校卫生》, 43(7), pp. 965-969. 2022
- 李银河(編) 《酷儿理论》, 文化艺术出版社, 2003
- 刘丽群、刘景超 “教科书中的“她”: 性别书写与性别建构” 《天津市教科院学报》, 2021年12月, 第6期, pp. 46-52, 2021
- 邱明月 “女性主义视角下初中语文教科书中女性角色研究”, 哈尔滨师范大学课程与教学论学科专业硕士论文. 2018
- 田敏旭 “人教版高中历史教科书中的人物性别问题研究——以2017年版为例”, 华中师范大学历史文化学院硕士论文. 2012
- 魏婵媛 “人教版2013版初中语文教科书中的女性人物形象研究”, 湖北大学教育学原理专业硕士论文. 2014
- 义务教育道德与法治课程标准(2022年版) <http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/s8001/202204/W020220420582343475848.pdf> 2022年11月22日参照
- 张丹、克里斯汀·德特黑 “教育公平视角下的教师性别意识及认知差异——以上海市小学课堂为例” 《全球教育展望》2018年第8期(总第373期), pp. 69-81. 2018
- 张旃轩 “现行人教版语文教科书的性别偏见研究”, 青海师范大学课程与教学论学科专业硕士论文. 2015